



UNIC Tokyo Dateline UN

November/December 2013 Vol.85

国際連合広報センター

気候変動がもたらす自然災害に向き合おう



フィリピンのタクロバンで、11月14日撮影 ©WFP/Marco Frattini

地球温暖化対策を話し合う国連の気候変動枠組み条約第19回締約国会議（COP19）が、11月11日からポーランドのワルシャワで開催され、予定の会期を1日延長して23日に閉幕しました。気候変動による異常気象が世界各地に被害をもたらす中、温暖化対策の新たな国際枠組みづくりに向け、交渉の加速化が求められています。

ハイレベル会合で演説を行った潘基文（パン・ギムン）国連事務総長は、開幕直前に超大型台風ハイヤンにより甚大な被害を受けたフィリピンの被災者と犠牲者、およびその家族に哀悼の意を表しました。そして、「全世界の人々が今、温暖化する地球の怒りに直面し、おびえて

いる」とし、「英知と切迫感、そして気候変動に取り組む決意をもって挑戦に立ち向かおう」と呼びかけました。

フィリピン政府の代表は演説の中で、「私たちはこの異常気象を止めることができる。この会議が、終止符を打つ会議として永遠に記憶に残るようにしよう」と、時折涙に声を詰まらせながら会議参加者に訴えました。

気候変動交渉に更なるはずみをつけるため、事務総長は来年9月の総会開幕に合わせて、「気候サミット」を開催します。地球規模の課題解決に向けた、各国政府の大胆かつ具体的な取り組みが期待されています。

若者のチカラで世界を明るく！

国連デー in 九州大学、開催 P2-3

国連アウトリーチ・ミッションが来日 P4

「人権デー 2013」障害者の権利について考える インタビュー・シリーズ P5

世界を変えるもう一人のマララたち
国際ガールズ・デー記念イベント P6

TOPICS@UN：『デザートフラワー』特別上映会、事務総長がアウシュビッツを訪問、初の世界トイレデー P7
根本かおる所長の国連だより P8

若者のチカラで世界を明るく！

～国連デー in 九州大学が開催されました～

10月24日は、国連憲章の発効を記念して設けられた「国連デー」。世界中で記念イベントが開催される中、日本では福岡市の九州大学箱崎キャンパスで26日、「国連デー in 九州大学：福岡から、若者の手で、世界をちょっと明るくしたい」が開かれました。タイトルのとおり、大学生を中心に大勢の若者が参加。将来の「国連マン」「国連ウーマン」を目指し、人事担当者からのアドバイスや、国連機関で働いた経験を持つ先輩の言葉に熱心に耳を傾けていました。

九州大学は、国連と高等教育機関のパートナーシップである「国連アカデミック・インパクト（UNAI）」に日本で最初に参加した大学の一つ。今年のイベントはその九州大学のユ

ヌス&椎木ソーシャル・ビジネス研究センター（SBRC）と国連広報センター（UNIC）の主催で開かれました。さらに、同大を拠点とする学生団体ユヌス・ソーシャル・ビジネス・クラブ（YSBC）の学生たちが中心となって、運営を盛り立てました。

オープニングでは、主催者を代表して根本かおる 国連広報センター所長が、2年ぶりの地方開催となった国連デーについて、「地方のパートナーと手を携えることなくしては、このように生で国連を感じていただく機会はありません。東京を離れて、福岡で国連デーのイベントを開けたことを嬉しく思います」とあいさつ。潘基文（パン・ギムン）国連事務総長が、若い世代が世界を変える力に大きな期待をかけていることを紹介し、国連活動への理解と積極的な参加を呼びかけました。

今年の基調講演のテーマは、「Serving the World ～ Career in the United



「国連で働くこと」をテーマに、基調講演を行う国連人的資源管理部アウトリーチ・ユニットのジョン・エリクソンユニット長

エリクソン ユニット長【写真上】が、時に日本語を交えながら、分かりやすく国連に入る方法を伝授しました。例えば、「国連」と一口に行っても、国連事務局の本部があるニューヨーク

だけでなく、国連ファミリーと呼ばれる国連開発計画やユニセフ、ユネスコまで含めれば、世界中に働く場所があることを

紹介。また、年齢や経歴に応じて応募方法も多様で、実際に様々な専門性と経験を持った人たちが活躍している現状を説明し、「我々は、国連の使命を信じ、母国を離れて働く意思があり、世界のいろいろな人たちと働ける人材を求めています」と応募を訴えました。

Nations（国連で働くこと）。世界に羽ばたく若者を念頭に、国連の採用活動に携わっている国連人的資源管理部アウトリー

チ・ユニットのジョン・

講演のあとは、会場の外でエリクソン ユニット長から直接キャリア・ガイダンスを受けられる機会もあり、将来国連で働きたいと考えている高校生から社会人まで、多くの若者が直接質問をぶつけていました。例えば、現在地方公務員を目指して

いるという長崎大学経済学部3年生の女子学生は、国連職員の中にも公務員出身者がいるのかどうか



将来国連で働きたいと考えている多くの若者が、キャリア・ガイダンスに参加した

を質問。エリクソン ユニット長から「もちろん。公務員、外交官、政治家などから国連職員になる人は多いですし、地方公務員出身者にも可能性はあります」との説明を受け、「希望が持てました！」と喜んでいました。

根本所長がモデレーターを務めたパネル・ディスカッションでは、「私たちが世界を

変える ～グローバル・イシュー解決のための国連の仕事、ソーシャル・ビジネスを考える～」をテーマに議論しました。エリクソン ユニット長



根本かおる UNIC 所長と九州大学 SBRC エグゼクティブ・ディレクターの岡田昌治 教授

のほか、九州大学から SBRC エグゼクティブ・ディレクターの岡田昌治教授と、言語文化研究院の稲葉美由紀准教授が登壇し、それぞれの実体験を交えつつ意見を交わしました。



九州大学言語文化研究院の稲葉美由紀 准教授とエリクソンユニット長

岡田教授は、国際派サラリーマンから、ソーシャル・ビジネスに携わるきっかけになったノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス氏との出会いを紹介。一方、根本所長と稲葉准教授は民間から国連機関に就職した自らの経験を共有しました。また、エリクソン ユニット長は、ますます深まる国連とビジネスの関わりと今後の可能性について、思いを語りました。

第2部のメインイベントは、学生チームがソーシャル・ビジネスのアイデアを競い合う「Yunus and Youth Social Business Design Contest 2013」。最初に、岡田教授が、市場経済主義に基づき利益の最大化や私的欲求の追求を目指す普通のビジネスとは違い、出資額以上の利益は株主ではなく事業や社員の福利厚生に還元し、自立・持続しながら社会問題の解決を目指すソーシャル・ビジネスについて解説しました。各チームは、このような考え方にに基づき時間をかけて練り上げたビジネス・プランを、8分間のプレゼンテーションに凝縮して発表しました。

提案されたアイデアは、ウガンダの特産品を売って得た収益で学校に通

える子どもを増やす（チーム名：「Making Fun With Education」）、児童養護施設でイベントを開くことで新たなコミュニティの形成を目指す（「RE: Dreamers」）、福岡市の中心から離れた九州大学伊都キャンパスで孤立的な学生に生き生きとした活動の場を提供する（「4次元がやがや門」）など、着眼点も支援の対象も様々。子どもたち見た報道写真から着想を得たエチオピアの哺乳瓶洗浄ビジネス（「Good Health for Children」）や、実家で作っている環境にやさ

しい業務用洗剤を、障害者の力を借りて家庭に普及させるプロジェクト（「エコ洗剤プ

ロジェクト」）など、個人的な体験に基づいた提案もあり、会場の共感を呼んでいました。

ビジネス・コンサルタントら7人の審査員の厳正な審査の結果、11月にマレーシアで行われる世界大会に進出する優勝チームは「エコ洗剤プロジェクト」に決定。代表者で京都大学情報学研究科・知能情報学専攻修士1回生の佐東芳輝さんは「すごく嬉しいです。いろんな方にお世話になってこの賞をいただけたと思っています。本当に勉強になりました」と喜びを語りました。また、観客の投票で選ばれる観客賞は



学生ならではのユニークな着眼点や、個人的な体験に基づいた提案に会場からも共感の声が上がった

「Good Health for Children」に贈られました。5時間にわたり、日本の若者のパワーを存分に見せつけ、今年の国連デーも盛況のうちに幕を閉じました。



学生チームがソーシャル・ビジネスのアイデアを競うデザイン・コンテスト

2年ぶりの地方開催となった国連デー・イベントでは、九州大学の学生団体が中心となって運営を盛り立てていただきました。



国連アウトリーチ・ミッションが来日



国連を目指す日本人に対して、各機関の人事担当者が採用制度などを広報する「国連アウトリーチ・ミッション」が2013年10月22日から24日にかけて来日しました。今回は、初の6機関(*)による合同採用説明会を早稲田大学、上智大学、国連大学、JICA地球ひろばで計6回にわたって開催。日本人職員の増員を目指し、国連の活動やそこで働くことの意義、さらに各団体の活動内容や必要としている人材などについて、詳しい説明が行われました。

* 国連事務局 (UN)、国連人道問題調整事務所 (OCHA)、国連開発計画 (UNDP)、国連人口基金 (UNFPA)、国連児童基金 (UNICEF)、国連ボランティア計画 (UNV)

アウトリーチ・ミッションのメンバーの1人で、国連人道問題調整事務所 (OCHA) の澤田泰子 人事担当官【写真下】に質問しました。

Q：日本人国連職員の数、理想とされる数を大きく下回っている主な理由は何ですか。言葉の壁も含まれるのでしょうか。



OCHAに限って言うと、日本人応募者自体がとても少ないです。これはポストが上に上がるほど

顕著で、母集団に占める数が元々少ないことが最終的に採用される日本人の数に反映していると思います。国連機関の筆記試験や面接は練習して慣れることができる部分もあるので、一概に言葉の壁が理由とは言えません。

面接では、他の人ではなくて「私」をとるメリットは何か、「私」はどのように貢献できるのか、どんな成果をあげてきたのか、と「自分」をアピールすることが求められます。和を尊重する日本人はチームワークがあると評価されますが、「私」はリーダーシップがとれるのか、緊急事態にどうやって決断するのか、な

ど、バランスよく上手に主張しないと、結果に結びつきにくいのかもしません。

Q：国連において、他国からの出生者と比べて日本人職員の特徴的なところはどのような点ですか。どのような評価を周囲から受けていると感じますか。

一般的には日本人は勤勉で真面目に仕事をする、チームワークに長けていて周囲との意見を上手に調整しながらコンセンサスを得ることができる、と評価されています。日本人に限ったことではないのですが、紛争地域や途上国などの現場で、その国での日本人のイメージがプラスに働いて、仕事がしやすい、など重宝される場合もあると思います。

Q：澤田さんで自身は、国連で働くことにどのような魅力を感じます

か。長く働き続ける秘訣のようなものがあれば、アドバイス願います。

世界的規模の問題に多国籍チームで関われるところ、その結果として世界で起こっていることが身近に感じられるようになっていくこと。様々な国の人と一緒に働くことで、自分の常識が世界の常識ではないことを肌で感じ、自分の経験の幅も広がり人として成長していけるところなどに魅力を感じます。

今まで働いてきて思うのは、好奇心旺盛で前向きであること、どのような状況でも、面白がるというか客観的に見る余裕を持つことと、仕事以外の部分とのバランスをとることの大切さです。家族の理解、喜怒哀楽を共有できる先輩や同僚、友人に恵まれたことも今まで続けてこられた理由のひとつです。



国連アウトリーチ・ミッションによる説明会が行われた早稲田大学で。参加者からの熱心な質問が相次いだ

「人権デー 2013」 障害者の権利について考える

今年の「国際障害者デー」(12月3日)から「人権デー」(12月10日)にかけて、国連広報センターは障害者の権利にスポットを当てたインタビュー・シリーズをウェブとFacebook上で紹介しました。障害を持つスポーツ選手や会社員、障害者雇用に関心のある企業、支援団体など、関係者の皆さんのお話から「心に残る一言」を、シリーズを担当した妹尾靖子広報官【写真右・中央】がお届けします。



「車いすでプレイするということは、決してすごいことでも偉いことでもなくて、皆さんがスポーツを始めるのと同じ気持ちなんです」

ー 国枝慎吾さん（プロ車いすテニスプレーヤー）

妹尾広報官から一言：障害者と社会の「意識のずれ」をなくすことが、2020年東京オリンピックの成功につながるという言葉も印象的でした。まずは私たち一人ひとりの「心の扉」が開いている必要がある、と強く感じました。

「自分が一番好きな補正の仕事で、上手くできて褒められた時は本当に嬉しかったです。ずっとこの仕事を続けていけるように頑張ります」

ー 尾形勇旗さん（知的障害を持つユニクロ社員）

「障害とうまく付き合いながら、最大限に自分の力を発揮して、将来は会社からもっと信頼される存在になっていきたいです」

ー 岸本雅樹さん（車いす使用、ヤフー社員）

「障害を、できないことの理由にしないのが大切です。それぞれの能力を見極め、伸ばしていくために『適材適所』というポリシーを持っています」

ー 箕輪優子さん（横河電機）



「最初に何かを設計する時から障害者も参加して、アクセシビリティに配慮していくことで、環境も大きく変わっていくんじゃないかと思います」

ー 河村宏さん（特定非営利法人 支援技術開発機構 副理事長）

妹尾広報官から一言：障害者の生活向上に一役買っているアクセシブルな情報システムDAISY（デージー）は日本の技術をベースにしています。今年の国連総会の「障害と開発に関するハイレベル会合」でも使用されたDAISY、今後の普及が期待されます。

「議論を戦わせる中で、手話に対する理解が深まってきました。鳥取県の取り組みが、国内に着実に広まっていると感じています」

ー 平井伸治 鳥取県知事

「手話を学ぶことで、社会が決して単一的生活習慣、文化、世界認識で染まっているのではなく、豊かな多様性があるのだということを知ってもらいたいですね」

ー 松岡克尚 教授（関西学院大学）

妹尾広報官から一言：今年10月に「手話言語条例」が制定された鳥取県と、日本手話を専門科目として開講している関西学院大学。先駆けとなった取り組みに、今後注目です。



「これからは、障害を障害と感じなくなるような新しい社会モデルが必要とされています」

ー 株木孝尚さん（日本障害者フォーラム [JDF] 宮城事務局長）

妹尾広報官から一言：東日本大震災の被災地において仮設住宅の障害者を訪問し、彼らのニーズに対応する株木さんたちグループ。自らが障害者であり被災者である人々も、被災地の障害者支援に関わり、細やかなニーズに対応しています。

「人権デー 2013」インタビュー・シリーズ

http://www.unic.or.jp/activities/humanrights/hr_day_2013/

世界を変えるもう一人のマララたち

UNIC インターンが
お伝えします！

国際ガールズ・デー記念イベントを開催しました！

10月11日は、国連が定めた「国際ガールズ・デー」です。この日に先立ち、10月5日に国連広報センター（UNIC）と国際 NGO プラン・ジャパンの共催で「国際ガールズ・デー記念イベント～世界を変えるもう一人のマララたち」が国連大学のウ・タント国際会議場で開催されました。



続くパネル・ディスカッションでは、イルムさんに加え、大崎麻子さん（プラン・ジャパン理事）と加藤俊一先生（中央大学副学長）を迎え、「女子教育のためのイノベーション」をテーマに、女子の社会進出やリーダーシップ育成の促進について議論しました。

今年で2回目を迎える記念イベント。メイン・フォーラムに先駆けて行われたワークショップでは、タリバンに銃撃されたマララ・ユスフザイさんのドキュメンタリーと今年7月に国連本部で行われた彼女のスピーチ映像を、高校生・大学生を中心とした参加者およそ40名とともに鑑賞し、自分たちの身の回りにあるジェンダーの壁について話し合いました。

続くメイン・フォーラムの司会に抜擢された渋谷教育学園幕張高校2年の池端佳音さんはマララさんと同じ年の16歳【写真上】。根本かおる UNIC 所長からは開会の挨拶、および潘基文（パン・ギムン）国連事務総長のメッセージの紹介がありました。

基調講演では、パキスタンから来日した女子大学生イルム・ヌールさんが、貧しい中でも懸命に学ぶ彼女自身の経験を通して、女子教育の大切さ、それを妨げる女子に対する差別、早婚などについて語りました。「私がこの社会に生まれたことは私の責任ではありません。しかし、この社会を変えられなければ、それは私の責任になります」。大学卒業後は家族を支えながら、貧しい女の子でも通える学校をつくりたい、と希望に満ちた将来の夢を語る彼女の姿はとても印象的でした。



パネル・ディスカッションのテーマは「女子教育のためのイノベーション」

ディスカッションでは、女の子へのエンパワーメントと同時に、両親を含む周囲の人々の意識の変化が実は求められていると議論。これまでの女性像に縛られることなく、女の子にはあらゆる可能性がある、との認識を共有しました。

イベント終了後、UNIC インターンの女子4名がイルムさんにインタビューをしました。初めて訪れた日本の印象を聞くと、「女性が自由であることに驚きました。家族の同伴なしに街に出たり、学校へ行ったり、仕事をしたり、私の国では考えられません。常に男性の目を心配しないといけないのです」と語りました。

今後のパキスタンでの女子教育の普及については、「女の子自身が教育を受ける権利があると知ることがとても大切」と指摘。自分の人生の可能性を教育で大きく広げた彼女からは、マララさん同様、「教育が世界を変える」という強い意思が伝わってきました。

今年の国際ガールズ・デーは、私たち UNIC インターンにとって世界の女子教育の現状に対する理解を深めるとともに、女の子のエンパワーメントという課題が開発途上国に限らず、日本においても広めていく必要を認識した一日でした。



イルムさんにインタビューする UNIC インターンたち

TOPICS@UNIC

◎『デザートフラワー』特別上映会



UNIC インターンが
お伝えします！



©Desert Flower Filmproductions GmbH

「性差別による暴力廃絶活動の16日間」キャンペーンの一環として、国連広報センター（UNIC）主催、国連人口基金（UNFPA）と国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の共催により、映画『デザートフラワー』の特別上映会が11月27日に開催されました。

映画は、ソマリアの13歳の少女ワリス・ディリーが政略結婚から逃れて渡った英国でトップモデルとなり、国連特別大使として女性性器切除（Female Genital Mutilation = FGM）の廃絶に奔走する姿を描いた、実話に基づくストーリー。ワリス自身が3歳の時に受けたFGMの回想シーンでは、あまりの壮絶さに会場からすすり泣く声も聞こえました。

上映後、根本かおる UNIC 所長、佐崎淳子 UNFPA 東京事務所所長、小尾尚子 UNHCR 駐日事務所副代表によるトークセッションが行われました。一部の国で今も続くFGMの慣習や少女の早婚などの問題を解決するためには、女性たちから直接悩みを聞くと同時に、男性側の意識を改革することが必要と指摘。女性による全面的な社会参加と女子教育の拡充が、暴力の廃絶をはじめ様々な課題の解決に欠かせないとの思いを新たにしました。

来場者の中には女性だけでなく男性の姿も見られました。夜遅くまで多くの方にご参加いただき、皆さんの関心の高さがうかがえる集いとなりました。

TOPICS@UN

◎事務総長、アウシュビッツを訪問



©UN Photo/Evan Schneider

潘基文（パン・ギムン）事務総長は11月18日、ポーランド南部オシフィエンチムにあるアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所跡を訪問しました。献花を行い、スピーチに立った事務総長は、「世界はホロコーストを忘れても、否定しても、軽視してもなりません。私たちは決して警戒を解いてはなりません。そして、平等と基本的自由の推進のために、さらに多くの、はるかに多くのことをしなければならないのです」と呼びかけました。

TOPICS@UN

◎11月19日は「世界トイレデー」



©UN Photo/Amanda Voisard

全世界で適切な衛生施設を利用できない人々は約25億人に上り、屋外で排泄をする人々は10億人を超えています。

毎年、80万人以上の5歳に満たない子どもたちが下痢で不必要に命を落とし、その数は1分に1人を超えています。その最大の原因は、劣悪な衛生状況です。

国連は、衛生施設の普及を世界的な開発優先課題に据えなければならないとして、今年7月に総会決議を採択。11月19日に初めての「世界トイレデー」を迎えました。

「私たちが力を合わせ、トイレと衛生施設についてオープンかつ率直に話し合えば、人類の3分の1の健康と福祉を改善できる」と事務総長は呼びかけています。

根本かおる所長の

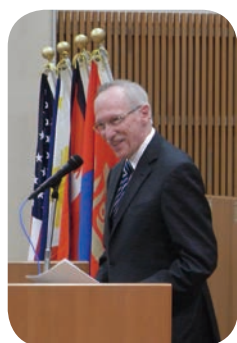
国連だより

この秋、2人の国連の高官が日本を訪問し、その仕事ぶりや人柄に触れる機会がありました。国連 PKO 局担当のエドモンド・ミュレ事務次長補（グアテマラ出身）と、紛争下における性的暴力担当のザイナブ・バンゲーラ事務総長特別代表（シエラレオネ出身）の2人です。



「自由を奪われた体験を持つからこそ」

国連 PKO では軍隊だけではなく、武装解除、治安部門の改革、法の支配や民主化など、平和構築に関わる文民担当官が大勢活動しています。日本は PKO 予算の 11% を拠出しているのに対し、PKO で活動する文民担当官のうち、日本人の占める割合は 1% 未満という少なさです。ミュレ事務次長補【写真下】は、その観点からも制服組のみならず、文民の分野について優秀な日本人の人材を提供してほしいと日本側に求めました。



グアテマラで政界に入る前はジャーナリストだったという経歴の持ち主のミュレ事務次長補に、どうして国連で平和と安全のために働くことになったのかを尋ねると、「グアテマラの独裁政権に反対して抗議したため、軍の友人から、『身に危険が及ぶかもしれないから、国外に逃れた方がいい』と忠告を受けて、国を離れていた

こともあります」とグアテマラ内戦時代のことを話してくれました。自由と安全の大切さを身を持って知ることが原動力になっているのでしょう。

一方のバンゲーラ特別代表【同右上】は、安倍首相が9月の国連総会で「女性」を柱に据えた演説を行い、紛争下の女性に対する暴力の廃絶を含む3つの分野で今後3年間で30億ドル超のODAを実施すると表明した直後の訪日だけに、安倍首相と紛争下の性的暴力への対応の強

化に向け、一層連携を密にしていくことを確認しました。

私は記者会見や市民社会の代表たちとの意見交換などで一緒しました。出だしは大変穏やかな口調で始まりながらも、ソマリアやコンゴ民主共和国などの紛争地域で出会った女性や少女たちの苦しみに話が及ぶと、自然と声が熱を帯び、力が入ります。

そんなバンゲーラ特別代表が、ふとこう漏らしました。「シエラレオネの紛争で、私は難民になった経験があります。遺体を集団墓地に運んで埋めるという体験もしました。紛争下で生きるということを私は知っています」



その言葉には、1991年から2002年まで続いたシエラレオネの内戦で苦しんだ当事者だからこそ言える重みがありました。レイプなどの性的暴力をなくすためにコンゴ民主共和国やソマリアなどの紛争下にある国々を精力的にまわるバンゲーラ特別代表の情熱の抛り所が少しわかったような気がしました。

ミュレ事務次長補にしる、バンゲーラ特別代表にしる、自由や権利を失った経験があるからこそ、平和のために奔走する今の姿があるのかもしれませんが。このような出会いこそが、国連が挑む課題について広報する私の活力になっています。



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 国連大学本部ビル 8階

TEL: 03-5467-4451

FAX: 03-5467-4455

URL: <http://www.unic.or.jp> / E-mail: unic.tokyo@unic.org

今年一年間のご支援をありがとうございました。2014年もどうぞよろしくお願いいたします。